下片岡(しもかとか)古窯跡の発見について

半　澤　幹　雄

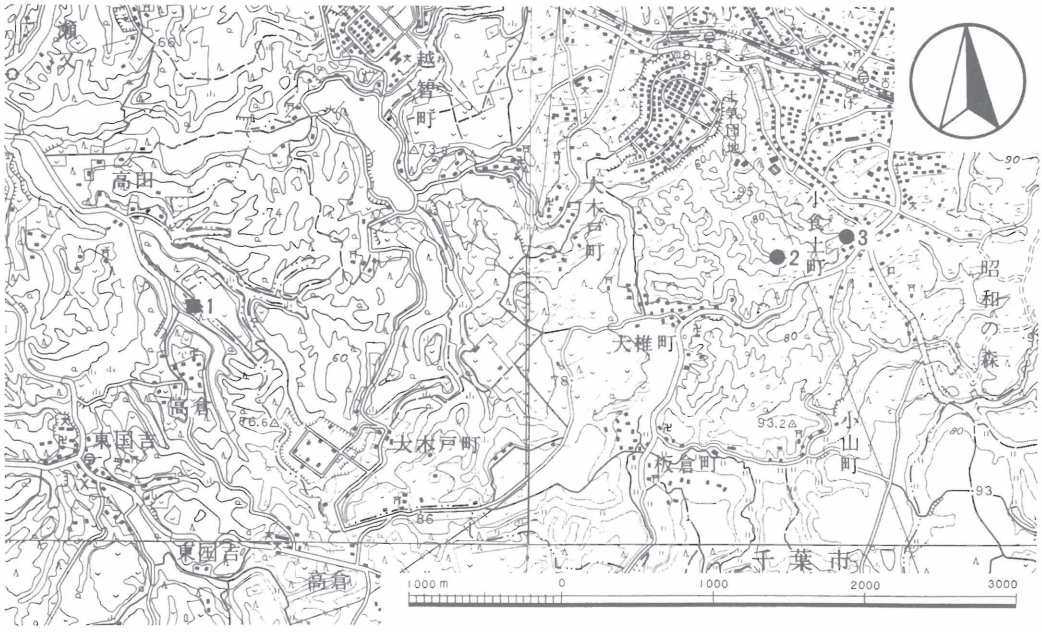
1．発見に至る経過

1989年1月中旬，㈶千葉県文化財センター土気事務所の岡田誠造主任調査研究員より当時第二班の班長であった佐久間に，「発掘調査が進められている千葉市土気緑の森工業団地造成事業地内の西大野第一遺跡から南側の水田面へ下る坂道を，団地上に展開する遺跡と周辺地形との関係を検討するために，何度か通っていた。何回目かに，ふと木根や崩落土が覆い被さるように垂れているカット面を見ると，窯壁の一部らしき真っ赤に焼けた面が眼に止まったので，台地上の発掘現場からジョレンを取ってきて，カット面を精査すると，明らかに窯跡と思われる焼けた面が認められるので見に来てほしい。」との連絡があった。私も，木更津市矢那窯跡群の発掘調査に携わり，古窯跡には以前から興味があったので，早急に現地見学を望んだが，丁度この頃は翌年度事業の積算作業もあり，一年で最も忙しい時期でもあったので，中々

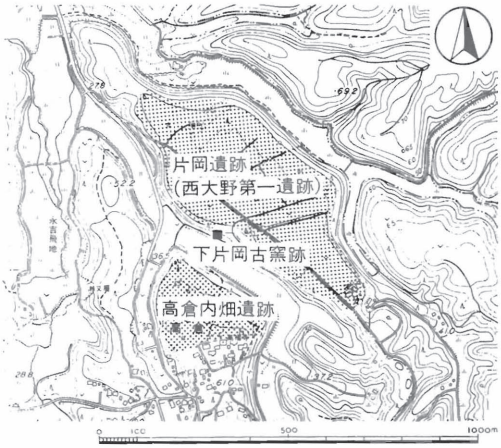
写真1　発見場所遠景

現地に赴くことが出来ず，やっと現地見学を実施できたのが2月15日であった。

千葉市土気地区には瓦窯も発見されているので当時，当センター千葉東南部事務所に配属されていた古瓦に詳しい永沼律朗主任調査研究員にも同行をお願いし，現地で検討した結果，岡田氏の観察の通り，この遺溝は明らかに窯跡と考えられ，



第1図　下片岡古窯跡位置図



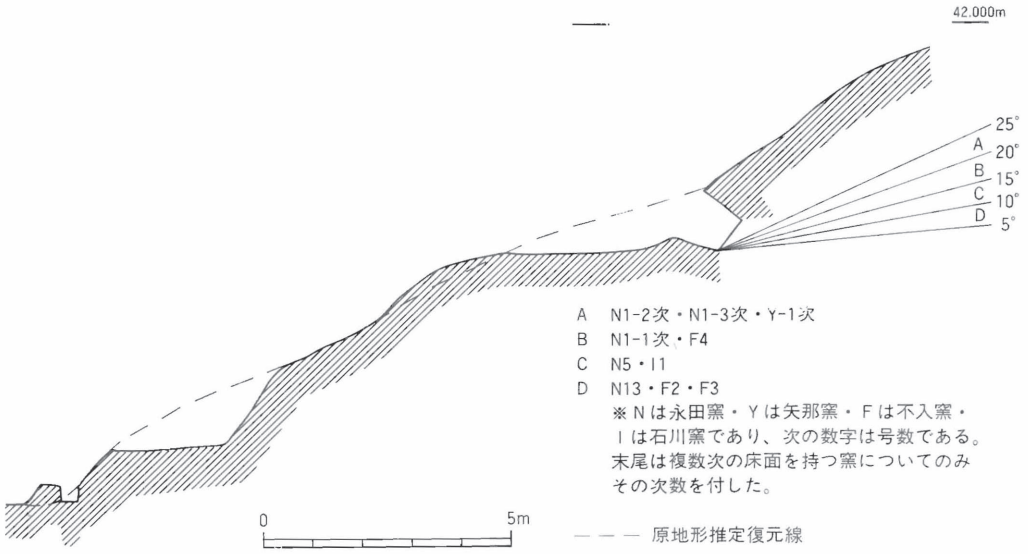
第2図　地形図

写真2　窯体付近近景

水田面より台地上に続く道によって削られ，周辺には焼土と炭も散布していた。窯跡焼面は一部セピア色を呈しており，この窯で「何物」かがかなり高温で焼成されたことが裏付けられ，窯床も2枚確認された。

しかし，この段階では，どういった性格の窯なのかが不明であったので，早速岡田・永沼両氏は窯跡周辺，佐久間は窯跡下の水田面の詳細な分布調査を行った。20～30分経過しても，須恵器片や瓦片が見つからず，単なる炭窯かもしれないと諦めかけていたところ「あったー！あったー！」と永沼氏の明るく叫ぶ声が聞こえてきた。この出土遺物は，口縁部から低部まで1/3ほど残存する「くすべ焼成」と称されている須恵器坏の大型破片であり，さらに崩落土中を調査したところ，同一個体の破片が一片発見された。この結果，本窯跡は須恵器を焼成した窯である可能性が強いと判断され，千葉県下における数少ない古窯跡の一つであることが確認された。そこで，夕闇も迫ってきたが，遺跡の重要性を考え，窯跡遠景や焼け面の写真撮影を行い，岡田氏に簡単な記録を作成するように依頼し，この日は現地を後にした。

以上の経過により，本窯跡は須恵器窯跡の可能性が強く，周辺斜面部の観察によって，さらに2～3基の窯跡の存在が想定されるに至ったが，残る問題は遺跡名であった。そこで，早速地図で調べたところ，本地点は千葉市土気緑の森工業団地



第3図　窯体発見斜面断面図

造成地に隣接するが，ぎりぎりのところで市原市に属すことが判明したので，市原市教育委員会文化課小出紳夫氏に照会した結果，台地上は片岡遺跡として周知されており，地番が市原市高田字下片岡392－6にあたるとの御教示を得た。

したがって，台地上の遺跡には「片岡」の小字名が付けられており，「下片岡（しもかとか）」といった小字名も県下には例を見ないことから，大字名の「高田」はあえて付けず，下片岡古窯跡と称することで差し支えないとの結論に達した。

（佐久間記）

2．環境と現状

以上のような経緯により新たに発見された，下片岡古窯跡(以下，下片岡窯もしくは本窯とする)の環境と現状について，ここでまとめておきたい。

下片岡窯（第1図－1）は東京湾に西流する村田川に向かって開析された支谷の南西斜面に存在する。水田から台地上に続く道の法面において確認された窯体断面は，標高約40m位置にあたる(第3図)。周囲の地形等から考えて，本窯の左右に2・3基の窯の存在する可能性がある。窯跡の存在する台地上は奈良・平安時代の遺物包蔵地である片岡遺跡や現在発掘中の西大野第一遺跡が，対面する南側の台地上には高倉内畑遺跡が存在する(註1)。また，東方約2kmには現在千葉市で調査研究が進められている南河原坂第4遺跡(第1図－3)(註2)

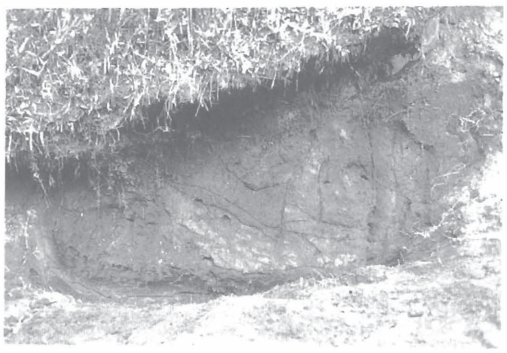
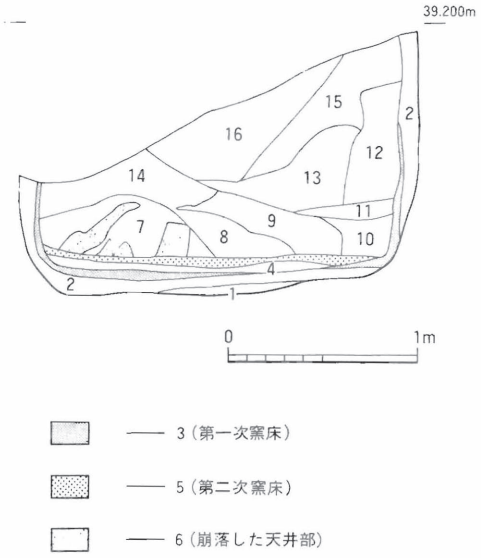


写真3．窯跡断面

坂ノ越遺跡（第1図－2）(註3)が存在する。

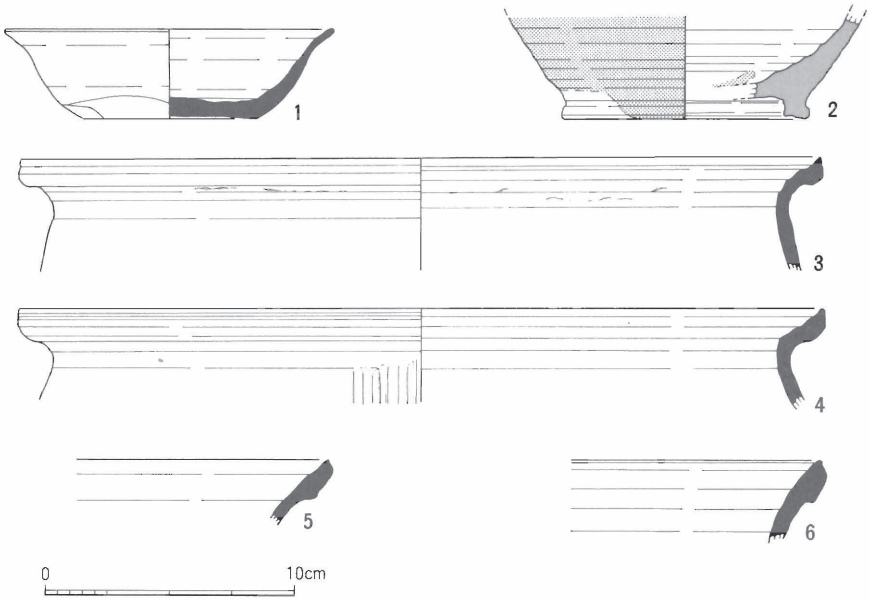
確認された窯体断面（第4図）は焼成部断面と思われる。床部・側壁（3層）はかたく焼けしまり，セピア色を呈している。比較的やわらかい暗褐色土層（4層）をはさんでセピア色の層（5層）が確認される。第二次床面と思われ，窯床が2枚存在する。以上のような状況から見て，いずれもかなり強く，しかも，長時間焼かれたものであろう。なお，第一次床面は幅160cm，第二次床面は180cmである。また，窯内第2次床面上に崩落した天井壁の一部と思われる塊（6層）が混入することや堆積の状況から考えて半地下式窖窯であったと思われる。焚口・燃焼部については確認されなかった。窯体の傾斜角度については不明である。参考として第3図に現在までにわかっている須恵器窯(註4)の窯体傾斜角度分布を付した。



土　層　説　明

1－赤紫色砂質土層	熱により変色した地山
2－赤橙色土層	窯壁
3－セピア色土層	窯壁（第一次床面）
4－暗褐色軟質土層	熱により変色した層
5－セピア色土層	窯壁（第二次床面）
6－青灰色土層	天井部の崩落したもの
7－赤紫色土層	熱により変質した層
8－赤色砂質土	熱により変質した層
9－茶褐色砂質土層	炭化物を含む
10－黄褐色砂質土層	かたくしまりがある
11－黄褐色砂質土層	暗褐色土を含み軟質
12－赤色砂質土層	熱により変色した層
13－茶褐色砂質土層	炭化物を含む
14－明褐色砂質土層	
15－暗褐色土層	やわらかくもろい
16－黒褐色土層	炭化物、焼土粒少量含む

第4図　窯体断面図



第5図　表採遺物実測図

3．遺物

1は窯に関する遺物であり，他は片岡遺跡及び西大野第一遺跡の表採品である。1は坏である。底部からゆるやかに内湾して立ち上がり，口縁部を強く引き出すように外反させる。口径13.2cm，底径6.8cm，器高3.6cmである。底部外面，および体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。体部下端の一部が青灰色を呈する他は内外面ともに暗褐色を呈しており，いわゆるくすべ焼成土器(註5)と呼ばれるものである。明らかに本窯跡の所産であると思われる遺物はこの坏のみである。2は灰釉瓶の底部である。胎土は粗密で，一部ガラス質を呈する。体部外面は釉により淡い黄橙色を呈し，一部淡緑色に発色している。胎土や色調などにより東濃系の製品であると思われ，虎渓山1号窯に相当する時期のものである（実測図中のスクリーントーン部は釉の付着の見られる部分である）。3は広口甕(註6)である。内外面ともに暗褐色を呈する。口径は約32cmである。口縁部から頸部にかけて回転ナデ調整が施され，体部には不定方向のナデが施される。4も広口甕である。口径は約32cm，内外面とも淡赤褐色を呈する。体部外面には縦方向の平行叩きの痕跡が見られ，内面には不定方向のナデ調整が施される。頸部では叩き痕を消すようにして，口縁部まで回転ナデ調整が施される。5は甕の口縁部である。小片であり，口径を復元することが不可能だったため，断面図のみを掲載した。内外面とも赤褐色で，口縁部は折り返し技法により肉厚につくられる。6も甕の口縁部断面である。口縁部はやはり厚くつくられ，内外面ともに赤褐色を呈する。以上の見てきたような須恵器（2の灰釉陶器片は除く）はその技法等から，常陸国産の系譜をひく下総を中心とした地域に見られる須恵器であると考えられる。

次に，各遺物のおおまかな年代について述べたい。6点の表採遺物を紹介したが，2の灰釉陶器については，虎渓山1号窯の時期ととらえられると前述した。若干の上下はあるとは思われるが，10世紀前半の年代が考えられる。3～6の須恵器は，下総国内の須恵器窯から出土した土器(註7)と対比させ，中原窯跡と並行する時期，すなわち9世紀中頃のものであると考えられる。また，八千代市北海道遺跡の「承和五年（838年）」の墨書土器(註8)と共伴する遺物と類似することなどから考えても，9世紀中頃の須恵器であろう。

1の坏については，形態的に類似すると思われる土器が8世紀末葉からみられるようである。しかし，口径／底径比が1.9～2.0と大きくなるものは，9世紀に入ってからのものであると思われる。東金市久我台遺跡(註9)において須恵器坏rとされ

る須恵器に類似しており，９世紀前半代より見られるとしている[註10]。

また，下総の生産遺跡から出土した遺物と対比した場合には，口径／底径比から，中原窯跡の古い時期に相当するものであると考えられる。また，口縁部を強く外反させる形態は，中原窯跡より古いとされる吉川窯跡の製品に顕著にみられる。中原窯跡については９世紀中頃，吉川窯跡については９世紀第一四半期が考えられている[註11]ことから，やや雑駁ではあるが，この坏については９世紀前半を中心とする年代が考えられる。

４．まとめ

今回，新たに発見された，下片岡古窯跡は常陸国産の須恵器の系譜をひく，下総を中心に見られる須恵器の窯跡である。操業年代については，僅か一点の土器からであるため，いささか不確実ではあるが９世紀前半を中心とする時期と考えられる。南河原坂窯や坂ノ越遺跡と近接しており，操業年代についても並行する時期があると思われることから本窯跡との関連性が考えられる。また，周辺の片岡遺跡や内畑遺跡との関係にも，注目すべきであろう。上総東北部を中心とする地域にこのような須恵器の分布が見られる[註12]ことから考えても，本窯の発見は県下（特に上総東北部）における歴史時代の土器様相，生産様相を明らかにするうえで重要な位置を占めていると思われる。本窯の保存，調査研究については充分留意するべきである。

なお，末尾となってしまったが，助言をいただいた倉田義広氏，村田六朗太氏をはじめとする方々，本稿を書く機会を与えて下さった方々に紙面をお借りしてお礼を述べたい。

註

１）片岡遺跡，内畑遺跡については市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図』北部編によった。西大野第一遺跡については㈶千葉県文化財センターにより調査が行われている。

２）千葉県文化財法人連絡協議会『平成元年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』によった。

３）倉田義広他「Ⅳ窯業」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』1986

４）瓦陶兼業窯も含めた。

５）栗本弘「小結」『八千代市村上遺跡群』千葉県都市公社1974年によるものであるが，本来，須恵器であり，特にくすべ焼成土器と呼称とする必要はないと思われる。しかし，資料紹介である点から一般的な「くすべ焼成土器」という表現を付した。

６）甑である可能性も考えられるが，ここでは広口甕とした。

７）倉田義広「下総の須恵器窯」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会1987

８）藤岡孝司「八千代市北海道遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会1987

９）小林信一「古墳時代から平安時代にかけての土器について」東金市久我台遺跡㈶千葉県文化財センター1988

10）東金市久我台遺跡調査報告書[前掲，註９]においては，須恵器坏ｒの出現する時期を奈良・平安時代期としており，９世紀前半代に比定している。

11）実年代については，寺内博之「印旛郡富里町吉川窯出土の土器」『印旛郡市文化財センター研究紀要』１㈶印旛郡市文化財センター1986によったが，註７の文献においては９世紀前半を中心とする時期としており，実測図を見る限りでは８世紀末まで遡る可能性も考えられる。

12）笹生衛「１．安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会1987

また，東金市久我台遺跡の報告書では須恵器に千葉市中原窯跡の製品と考えられるものが多数存在するとしている。